連載：現代管情報シリーズ

GTスタンダード 6V6

都来往人

★はじめに

6V6は，画期的な出力管として当時の業界に一大センセーションを巻き起こした初のビーム4極出力管：6L6(1936年7月発表) の弟分として，6L6と同じ開発プロジェクトチームにより，1936年末頃に開発されました.

海外の資料によると，開発時に意図された用途は，一般用受信機や中・小型アンプ等のシングル出力段で2.5W以上の低歪み出力を得ることにあったそうですが，使い易くヒータが省電力型のわりには手頃で大きな出力が得られることや，歯切れの良い再生音，バルブが小型といった数々の特徴のため，電蓄や業務用のモニター・アンプを始め，Fender や Mesa といったギター・アンプ等に幅広くかつ大量に使われました.

デビュー当初はメタル管でしたが，その後すぐにG管(ST-14)が，1939年にはGT管が出現し，1945年にはMT管の6AQ5が登場しました.

また，6L6ほどではありませんが，用途に応じたいくつかのバリエーションが生まれました.

その中でもGT管タイプの最終バージョンとして1959年に発表された7408(Hi-Fi用途向けに規格の向上(プレート損失12W⇒14W) とグリッドの構造強化等を図ったモデル)は，今もなお米国では高い人気があるそうです.(私は現物を持っていませんが，機会があれば1960年代製のRCA-7408などは一度見てみたいものです).

さて，現在，6V6はPhilips-ECGやGE等の製品が米軍放出品のJAN球として大量に出回っている一方で，1990年頃からは，旧ソ連時代のReflectorやVoskhod, Kalugaといった工場で作られた製品が輸入され，今もなお，ロシアと中国で現行品として生産されています.

6V6は，6L6とともに60年以上の製品寿命を誇っていますが，このことは6V6に魅力があって，い

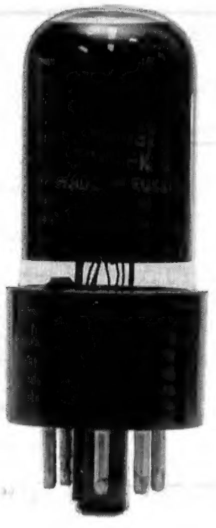
現行紹介品

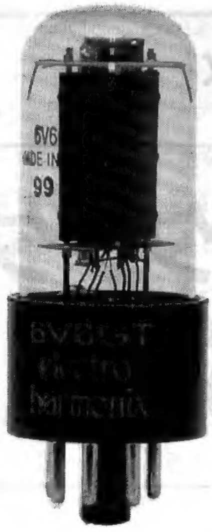
No.	ブランド	モデル	備考
1	Ｓｏｖｔｅｋ	６Ｖ６ＧＴ	カーボンスート球
2	Electro-Harmonix	６Ｖ６－ＥＨ（Ｔｙｐｅ－２）	クリアガラス球
3	曙光電子	６Ｖ６ＧＴ	カーボンスート球

参考比較品

No.	ブランド	モデル	備考
4	Golden-Dragon	６Ｖ６ＧＴ	カーボンスート／曙光電子ＯＥＭ
5	Ｒｅｆｌｅｃｔｏｒ	６П６Ｃ／６Ｐ６Ｃ	カーボンスート／７０年代製
6	Ｒｅｆｌｅｃｔｏｒ	1515	クリアガラス球／Ｔｕｎｇｓｒｕｍ元箱入、６Ｖ６高信頼型
7	Electro-Harmonix	６Ｖ６－ＥＨ（Ｔｙｐｅ－１）	最初期ロット／ベースに印字／クリアガラス球
8	Ｓｙｌｖａｎｉａ	６Ｖ６ＧＴ	カーボンスート球／比較参考品
9	Ｓｙｌｖａｎｉａ	６Ｖ６ＧＴＹ	軍用／クリアガラス球／比較参考品
10	ＧＥ	６Ｖ６ＧＴＹ	軍用／クリアガラス球／比較参考品
11	マツダ	６Ｖ６ＧＴ	クリアガラス球／比較参考品

●今日紹介する「6V6」ファミリー





かに広く使われているかを端的に物語っています．

今回は，小柄ながら魅力的な6Ｖ6の現行品を横断的にご紹介したいと思います．

★ロシア製

1．Sovtek-6Ｖ6GT/カーボン・スート球

米国の真空管商社：New Sensor社によるロシア製真空管のブランド：Sovtekからは，管壁が真っ黒にカーボン・スートされた6Ｖ6GTが発売されていますが，これは皆さんお馴染みのロシア製6Ｖ6GTと同じ球で，原型は6Π6C/6P6Cという旧ソ連時代から生産されている6Ｖ6相当管です．

製造メーカーは6Ｌ6系やElectro-Harmonix球で有名なReflector社です．

Sovtek-6Ｖ6GTは，管壁の側面が真っ黒に濃くカーボン・スートされているため，電極はほとんど見えませんが，プレートは灰色のアルミクラッド鉄板製で，ロクタル管の7Ｃ5のように中央部が楕円状に大きくふくらんだ行灯型をしています．G1フィンは灰色のＵ字型で，ビーム形成板は銀色です．

電極は丸い上部マイカに放射状に4本設けられた板バネで管壁に保持され，下部マイカは小判型です．ステムはピンチ型でWE同様に上部が平らに仕上げられた丁寧な造りです．

ゲッター台はプレート支柱に1個溶接されたロシア伝統の丸皿型で，管底部に向かって銀色のゲッターが飛んでいます．

バルブの丈は米国製の6Ｖ6GTよりも若干長く，管壁には銀色のインクで型番とブランド名と原産国が表示されていますが，ロット番号の表示はありません．ベースは袴が長めで縁には丸みがあります．

90年代の製品はロシア球独特の青と黄色の2色刷りの箱に入っていましたが，現行品は赤白青3色刷りのいわゆるSovtekデザインの化粧箱入です．

2．Electro-Harmonix 6Ｖ6-EH（type 2）/クリアガラス球

99年8月頃に発表された6Ｖ6-EHは，現行生産されている6Ｖ6の中では唯一のクリアガラス球です．

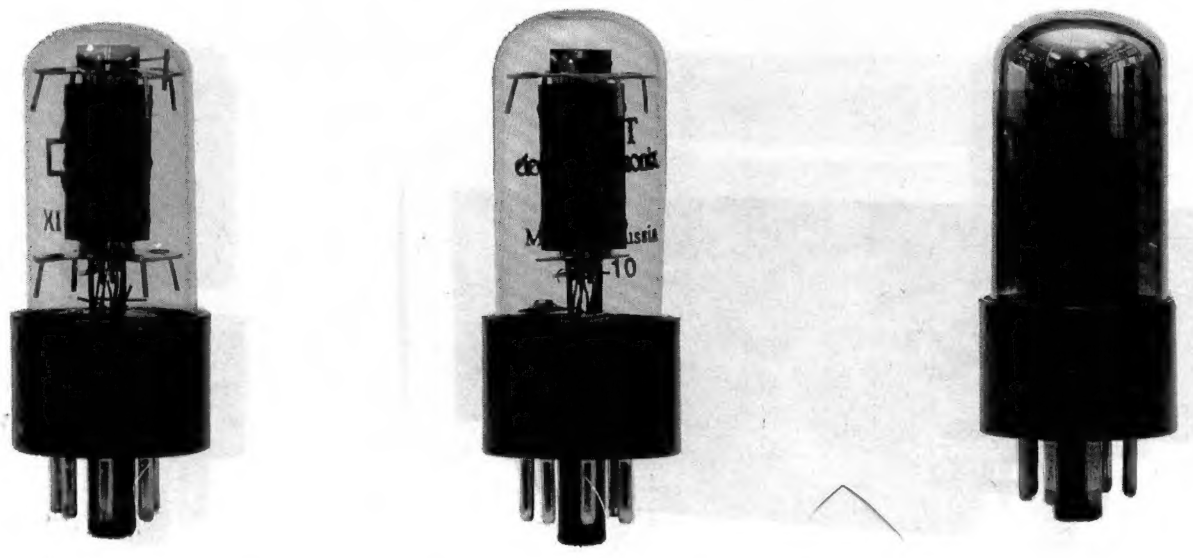
製造メーカーはSovtek-6Ｖ6GTと同じくReflector社です．

6Ｖ6と言えば，1960年代頃まで欧米ではカーボン・スートされた球が多かったためか，現行品として継続生産しているロシアや中国においても何故か6Ｖ6だけはご丁寧な事にこの伝統がずっと守られています．

ところで，最近になって70年代製の1515というロシア製6Ｖ6系のクリアガラス球が国内で入手可能になりましたが，後述するように，1515は6Ｖ6-EHよりもプレートがやや短く，電極支持構造も異なるため，6Ｖ6-EHが1515の復刻品という訳ではなさそうです．ちなみに1515もReflector社が製造した球です．

球を割って分解してみなければ断言できませんが，6Ｖ6-EHはSovtek-6Ｖ6GTをクリアガラス化したものではないかと思われます．

灰色の溶接型プレートは，後期の米国製6Ｖ6GTやロクタル管の7Ｃ5のプレートによく似た，真ん中が楕円に膨らんだ行灯型で，寸法は米国製6Ｖ6GTより少し大きい印象です．G1フィンは灰色のＵ字型で，ビーム形成板は銀色です．



Sovtek-6 V 6 GT と共通の長めのベースに赤インクでブランド名と型番が表示され，管壁には黒インクで型番と原産国とデートコード (9908) が表示されていました．また，化粧箱も一般的な赤白青 3 色の Sovtek 球の箱を流用し，型番だけが 6 V 6 EH と印字されていました．

やがて 99 年 10 月製以降のサンプルでは，ベースが約 5 mm 程短くなり，バランスのよいデザインになりました．

あわせて，赤インクによるベースへの印刷も消え，管壁にのみ黒インクで型番とロゴ・原産国，デートコード（例：9910）が表示されるようになりました．

さらに化粧箱も現在の EH 球専用の黒いタイプに変更されましたが，箱の表示は 6 V 6 GT となりました．これが現行品の type 2 です．

2000 年以降に入荷したロットからは，管壁に EH ブランドのトレードマークの Lion Face が青インクでマーキングされたものも見られます．

通常，EH ブランドの球には既存の Sovtek 球にオーディオ向けにさらなる改良が加えられているのが特徴ですが，6 V 6-EH は，総発売元の New Sensor 社のカタログによると，カソード・コーティングを改良し，グリッドの目合わせをより注意深く行い，プレート材を三重合金製に変えて頑丈にし，電気的には Ep max を 475 V にアップして Fender の Deluxe Reverb などの高 Ep 動作のアンプにも適応するようになっているそうです．

規格表が確認できないため，6 V 6-EH が通常の 6 V 6 の Ep max 350 V から 125 V アップの 475 V になったというカタログの表現については鵜呑みにはできませんが，6 V 6-EH は 6 V 6 の Hi-Fi 用途向けバージョンとして今もなお米国で人気の高い 7408 の代替品としてのモデルではないかと思われます．

★参考紹介

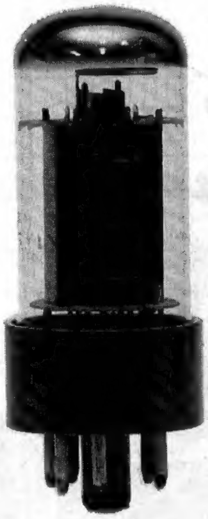
1515（ロシア製 6 V 6 GT の高信頼管版/クリアガラス球）

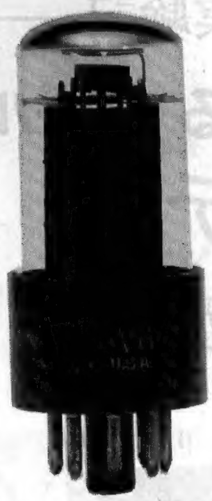
1515 はロシア製の 6 V 6 GT 相当管で，Electro-Harmonix 6 V 6-EH 同様に，電極がよく見えるクリアガラス球です．

製造メーカーは，現行品の 6 V 6 GT を造っている Reflector 社で，我が国には主に 70 年代の製品が輸入されています．2000 年から友誌 MJ 誌の広告に掲載され，秋葉原の一部の店でも入手可能となりました．

真ん中が膨らんだ行灯型の灰色の溶接型プレートや，U 字型の G 1 フィン，上部マイカに放射状に 4 本設けられた電極支持用の板バネや長めのベース等，一見して 1515 は 6 V 6-EH とよく似ています．

けれども 1515 は，プレートの丈が 6 V 6-EH よりもやや短く，上下マイカとの間隔が 4 mm と 6 V 6-EH の倍も広くなっているため，横から銀色に輝くビーム形成板がよく見えることや，上下のマイカはともに透明(6 V 6-EH は白濁) の丸型で，電極支持用の板バネが放射状に 4 本設けられ，電極を 6 V 6-EH の 2 倍の 8 点で管壁に支持している事や，カソードの振動を抑制するために上部マイカの 6 ピン方向に設けられたポストから横に伸びたワイヤーにカソード上端部が溶接される (軍用超高 Gm 3 極管 6 C 45-Pi のような工夫) など，6 V 6 (6 P 6 C/6 П 6 C) 以上の耐震対策が盛り込まれています．これらのことから，6 V 6-EH は 1515 の復刻品ではないように思われます．





★中国製

3．曙光電子（Shuguang）6Ｖ6-GT/カーボン・スート球

現行の6Ｖ6というと，ロシア製しか存在しないのではないか？　と思われる方もおられるかも知れませんが，建国当初から旧ソ連の技術的援助を受けていた中国では，国営工場において旧ソ連が製造していたものと同じ形式の球を国産化していました．その中にはこれからご紹介するロシア製6Ｖ6(6Ｐ6Ｃ/6П6Ｃ)の中国版も含まれています．

製造は中国最大手のメーカー：曙光電子(Shuguang)で，原型名はロシアと同じく6Ｐ6Ｃです．

国内では出回っている数量がまださほど多くないため，一般的ではありませんが，一応ご参考までにご紹介したいと思います．

中国製6Ｖ6GTは，外観はSovtek-6Ｖ6GTと同じく管内が真っ黒なカーボン・スート球で，管壁には曙光電子のブランドを表すSGマークとElectron Tubeの文字，型番，原産国が白インクで印字されています．

ロシア製Sovtek-6Ｖ6GTとの違いはベースの底の仕上げのみです．

中国曙光電子製の6Ｖ6GTのベースの縁のモールド部分が薄手でセンター・キーから放射状に8本のリブが設けられているのに対して，ロシア製6Ｖ6GTのベースは縁のモールド部分が厚手で，センター・キーから延びる放射状の8本のリブが無いフラットな底部をしており，ピンの脇にはピン番号の数字が入っています．

かつて英国PM-Components社によるGolden-Dragonブランドからも6Ｖ6GTが発売されていましたが，これは曙光電子の製品を英国で選別したものです．

★まとめ

同じビーム出力管にもかかわらず，約30種類のバリエーションを持つ現行の6Ｌ6(本誌2001年4月号参照)に対して，弟分の6Ｖ6の現行品はわずか3種類と寂しい限りです．

これは現行6Ｖ6の主な用途が中・小型ギターアンプの出力管であることと，6Ｖ6自体が大変ポピュラーで，ヴィンテージ時代に製造された球や米軍放出のJAN球(Philips-ECG製等)が市場でまだ比較的容易に入手できることや，併せて小柄な外観に加えて99年の6Ｖ6-EH登場までは現行品は中身が見えないカーボンスート球しかなかったため，外観上の魅力に乏しかったというのがその理由ではないかと思います．

けれども，歯切れの良いことで親しまれている6Ｖ6の再生音は，6Ｌ6に負けないほど魅力的ではないかと思いますし，6SN7GTや5Ｙ3GTと同じ小柄な外観で手頃な出力が得られることを活かして，往年の米国製モニター・アンプのようにコンパクトに製作したアンプにはある種の機能美も感じられます．

大型管ばかりではなく，たまには6Ｖ6のコンパクト・アンプを製作してサブ・システムで音楽を楽しむというのも小粋だと思いますし，あるいは3結にしてバイアスの深い大型三極管のドライバー管として使う方法もあります．そのような時にはぜひ一度，お手持ちの6Ｖ6を現行品に差し換えて実験されてみてはいかがでしょうか？